

総務文教常任委員会視察研修【認定NPO法人 キーパーソン21視察】

日時 平成28年5月11日(水) 14:14~16:15

出席議員 委員長：高橋政悦 副委員長：鈴木孝寿

委員：北村光明、木村好孝、口田邦男、中島里司

議長：加来良明

事務局 事務局長：佐藤秀美

執行側 学校教育課長：斉木良博

キーパーソン21出席者

朝山代表理事、中島事務局スタッフ

議 件 所管事務調査「学校現場における教育活動の状況について」
キーパーソン21視察(川崎市) ●キャリア教育等について

1. 開会 鈴木委員 14:14

2. 挨拶 14:14~14:15

委員長(高橋政悦)：今日はお忙しい中、貴重なお時間をいただき、勉強させてもらえるということで大変ありがとうございます。それなりに勉強はしてきたつもりだが、北海道にはないので、中身を詳しく学んでいきたいと思う。

3. 趣旨説明 14:16~14:18

委員長：清水町でも必要である部分に関して、学校ではできないことであれば何らかの組織をつくるなりして骨太の子どもを育てるための取り組みをしなければならぬのではないかということで学ばせてほしい。キーパーソン21の趣旨及びきっかけとしてなぜNPO法人だったのか、株式会社でもよかったのではと思うが、その辺の経過及び今の取り組み内容等を教えてもらいたい。

朝山代表：一通り私どもの活動を伝えて質問を受けるというイメージでよいか。

委員長：はい。

朝山代表：清水町でも地域の農家でしかできないようなことがあるのであれば検討するということがよいか。

委員長：田舎でも同じで、今の子どもは線が細く、要するにこの枠の中にいたら心配ないという教育なので、個性が死んでしまうという部分もある。また、他の町でも全然やっていないことなので、先に特化できればなというイメージを持っている。

4. 説明 14:18~14:53

朝山代表：今日は遠いところありがとうございます。私どもは「一人ひとりのわくわくエンジンが未来を救う」と言っている。今も言ったとおり、子どもたちがこれからの未来を担っていくので、子どもたちが自分から「こうしたい」「やりたい」「こういう未来を創りたい」「こんな生き方をしたい」という気持ちが子どもの中になれば、新しい未来を創ろうと思わない。今ある社会の枠組みの中に子どもを当てはめようとしているがゆえに不登校やいじめ、家庭内の問題、働きたくないという若者を育ててしまっていることがとても残念だと思う。そのためには子ども一人ひとりの意

欲やモチベーションを育てることが大事なのではないか。学校教育の中でもそのように先生も努力をしていると思うが、私たちもやり方があり、子どもの意欲などがどんどん変わっていくということを目的にやっている。

立ち上げるきっかけは、長男の学校が蛍光灯に石鹼を投げる、廊下に水をまく、牛乳を爆発させる、トイレを壊すなどして、学校崩壊したこと。私はなぜこんなに暴れるのかと思うようになり、暴れてエネルギーを放出する子どもと無気力になる子どもの2パターンいると思い、何が起きているか考えるようになった。大人に言われても自分がこうしたい、自分の地域での役割や学校での役割、家庭内での役割をなかなか見つけられず、子どもが自ら一歩踏み出して行動しているのではないかと思うようになった。また、私は母親として自分の子どもに何を残せるかと考えた時に、自分の本心、気持ちが素直に向いて、わくわくして動き出さずにはいられない原動力（わくわくエンジン）を探し出すに尽きると私の中で結論を出した。子どもに残せるのは、いい大学に入れることでも、一流企業に入れることでも、財産を残すことでもない。では何だろうと思った時に、3人の子どもを同じように育てても皆違うことに気付いた。そして、子ども一人ひとりの特徴や強み、いいところを生かし、考え、行動し、判断・選択をして、自分で責任をもつというような「自分力」でものを考えられる人間に育てることが、子どもに残せる唯一のものだと思った。この教育が今の学校教育、地域の教育、家庭の教育の中で成立しているのかというと、自分も含めて「ノー」だと思った。

長男が中3になり、高校受験がある段階で「高校に行かない」と言った。その時に高校に行かないという選択肢があったことに驚き、日本の義務教育は中学校までだから、高校に行かなくてもいいと衝撃を受けた。遠足の300円のおやつは何を買うかから始まり、高校に行く、行かないという選択肢からすべては子どもが判断していくことが教育の中ですごく大切なことだと感じた。

この団体をつくったのが3人の息子たちだけだったら何とか育てられるかもしれない、いろいろな経験をさせたりなどしてやれると思った。中学校の時「こんな学校だったら転校しようか」と言ったら「いい。友達がいるから僕はこの学校に行く」と、学校というのは友達がいって、勉強を教えてくれる先生がいって、切磋琢磨して、部活動をやったりといろいろな経験をしたり、知識を増やしたりして自分が成長できる場だけど、今は本来の学校ではないということも言いつつ、そんな学校にでも子どもは行きたいと言った。そこで、アツと思い、自分の息子だけを育てても息子が出た社会の中のお友達たちがやる気がない、やりたくない、つまらないというような人たちが世界が構成されていたら息子も面白くないなと思う。これは日本中の問題なんだから母親としてもこのままでは息子たち3人ちゃんと育てられませんかという社会へのヘルプでもあった。もっと地域の皆さん、学校だけではない、家庭だけではない、企業も行政も地域のいろいろな団体も皆で子どもたちと一緒に育てていきませんか、育てていただけませんかというお願いの意味もあって、息子だけではない、全ての子どもが自分を生かしていきいきと仕事をして生きていくということを日本中の子どもたちにやろうと思い、2000年12月にキーパーソン21を任意団体として設立した。

清水町は人口どれくらいですか。

斉木課長：1万人弱です。

朝山代表：小学校と中学校、高校は何校あるのか。

斉木課長：小学校2校、中学校2校、高校は1校ある。

朝山代表：日本の子どもたちといっても清水町があてはまるかわからないが、小学校時代は野球選手になりたい、ホクレンで働きたい、お花屋さんになりたいなど、夢と希望をすごい持って、卒業式に「僕は〇〇になりたいと思います。だから中学に入ったら英語の勉強頑張ります」と皆言い、母親たちは涙して、「立派に小学校を卒業し

てくれた」と嬉しかったが、中学・高校になるとなぜだか「どうせ俺なんかだめだ」「つまらない」「勉強する意味がわからない」とか、自分がやりたいこともわからないし、自信無いし、将来に希望が持てないとなぜか変わってくる。大学生に聞いても仕事には嫌なことしか思いつかなく、「やる気がおきない」「仕事が難しすぎる」と言って働きたくない。就活自殺というものも起きていて、たくさんの学生が就職を苦に自殺をするということも現象として起きてしまっている。これは自己肯定感が低くて、自分だけではなく社会に対して夢や希望を持っていない日本の若者というのが浮き彫りになり、うちの息子と全く同じじゃないかと実感した。実感値だけではなく、平成26年に「子ども若者白書」を内閣府が出し、日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの7か国で比較している。これを見ると「自分自身に満足している」が日本では45.8%で、アメリカが86%。「つまらない」「やる気が出ない」と感じている日本の若者は76.9%、フランス44.4%。「40歳になった時のイメージで幸せになっている」というのが、日本では66.2%、アメリカ86.8%。「うまくいくかわからないことに意欲的に取り組む」は、日本は52.2%、フランス86.2%。「社会現象が変えられるかもしれない」と思っている日本人が30.2%、アメリカ52.9%。「将来へ明るい希望を持っている」が61.9%、アメリカは91.1%とこんなことがあって、実態として出ている。これを見ていると、社会のために役立ちたい気持ちを持っているが、自分や社会の将来に希望を持ってないと感じているということが浮き彫りになっている。それはなぜかと考えた時に、成長の過程で自分自身を肯定的に捉える「俺ってすごいだろう」とか「俺面白くてしょうがない」という形で、自己肯定感が上がらなく、非常に低いということが浮き彫りになってきている。

ひとつ面白いのは、社会と自分の関係というところで、「自国のために役立つことをしたい」というのだけが日本で54.5%で、7か国中トップだった。何かしら役に立ちたいという日本の若者の気持ちがあり、ボランティア活動をする子どもも増えているし、自分を生かしたいという気持ちが強くなるのではないかと思っている。

では、今の日本の子どもが直面している問題とは、いじめ、不登校、フリーター、引きこもりというのは永遠とあるし、人間が寄り集まればいじめなども大人の世界でもあるが、子どもの世界でもある。高校退学・中退者も多い、働かない、働きたくない若者たちもたくさんいる。就職を苦に自殺、貧困の連鎖をしている。

学校の先生たちも大変苦悩されて、ノイローゼで学校に行かなくなってしまう先生も増えてしまい、多様な児童生徒と毎日向き合わなければいけない超多忙な日常というのが先生にのしかかっているようで、学級でも孤独、先生同士の横のコミュニケーションがない、縦のコミュニケーションもない、モンスターペアレンツと言われる人たちがいると言葉の殴り込みを先生たちに仕掛けてくる。世間からは先生なんだからと言われて冷たい視線を浴びてしまう。1年目からプロの教師とならなければいけない。学習手法の変化に対応しきれていない。昔はティーチングでよかったが、今はアクティブラーニングをやれだとかいろいろなことを先生も言われる中で、ティーチングで正解のある授業をやっているということは崩壊しつつある。私の感覚ではもはや学校の先生はいらなくなる職業になりつつあると思っている。なぜならば、勉強する意欲さえ育ててしまえばネット上で自分でいくらでも勉強ができる。もちろん基礎学習は必要だが、先生に求められる資質というのはファシリテーションの能力やコーチングの能力というものになっていくと思っている。あとは、アクティブラーニングを生徒にさせて、その中で学んだことをファシリテーションしていく（自分で考える、発言する、行動する、学ぶ）ということを繰り返しのわかる先生しか残っていけなくなる。基礎学力を教えるだけでは教師という職業が立ち行かなくなっていく時代が何十年後かにはくると思う。その転換が先生たちに求められており、先生たちも苦勞している。やれと言われてもどうしたらいいのか

からないが、研修をしているわけでもないので、先生たちは大変苦勞している。共働きの夫婦も増えているので、子どもとの時間をなかなか持てない。子どものやる気も上げられない。うちの子はいじめにあっているかもしれない。学校に行かなくなった、親子で進路希望の食い違いが起きており、親の希望が子どもにすごく反映されるので、親子での進路の食い違いというコミュニケーションギャップが生まれてきてしまっているという親子が非常に増えている。未来に対する不安があったり、相談する人もいない。お母さん同士も仲良くはするものの、真剣にそんな話をするのはちょっと恥ずかしいので、お母さんたちも大変な苦悩を抱えている。

日本の子どもたちの教育環境は、教師は一斉授業とか画一的な教育を戦後からずっとやってきているが、均一な産業人を育てるということをしてきている。今だと均一な産業人を育てるということは行き詰っている。この経済の成長は右肩上がりにならないということは明白だとすると、今までと同じような教育ではなく自分で考える子どもを育てなければならない。また、個性を認めてあげなければならない。均一な子どもを育てるということはもう立ち行かなくなってしまう時代が来てしまった。なのに画一的な教育だけをしていると齟齬が生じてきてしまう。保護者は保護者で固定概念や価値観があり、大学に行ったり大企業に就職すると安心と思っているが、大企業も今は潰れるので安心なんてない。固定概念の中で子どもは「本当にこれでいいのか」という意欲がわからず、大人が言うものに丸め込まれるという感覚で悩んだり迷ったり、諦めたり、学校に行かなくなったり、いじめにあったり、働きたくないといった問題が起きている。このことが大きな原因のひとつではないかと思っている。だとしたら、これを変えなければならない。

キーパーソンではどんな理想の社会を描いているのかということ、子どもが中心にいて、学校と家庭という場所に基本的にいる。行政や企業、団体、シニア団体、NPOなどのいろいろな人たちが社会と関わって子どもを育てていく。子どもが自分のわくわくエンジンを発見して、いきいきと仕事をして生きる社会をつくりたいと思っている。そのためには学校の先生だけではなく、あらゆる立場の大人たちが本気で次世代を育てるということを理想の社会というふうに考えている。

そうはいつでも、大人たちがただ寄り集まっても何をしたらいいのかという話になる。私たちは15年間プログラムの開発をやってきた。現場の先生たちの声を聞き、企業の方の声を聞き、保護者の話も聞き、大学生の悩みも聞いてつくってきている。いまだに開発は終わらなく、ずっと続いているが「夢・自分発見プログラム」というものを開発し、今までに35,000人以上の子どもたちに実施を示している。

キャリア教育をいろいろなふうに考えていると思うが、私たちが大事にしているのは「自分を知る」ということで、ここを一番の強みとしている。子どもは自立をすることが目的で、自分を知っていくうちに社会の仕組みを知り、それと自分を組み合わせる中で社会の中に自分を放り込むようにして自立していくというイメージがあり、キーパーソンでは「自分を知る」ということを一番大切にしている。キャリア教育をやっている多くの団体や企業は「社会を知る」ということをやっている。経験をすることはすごく大切だが、ただ経験をするだけでは自分はどうしようかということを考えるまでに至らない。わくわくエンジンがわかった子は自分軸でものが言えて、自分軸で判断していくことができるようになる。それが大事だと思っている。それが無かったら単に「お父さんがそう言ったからここの会社に行ったのに、ぜんぜんだめだった」と人のせいにして文句を言い出す。他責から自責にしなければならない。自分が決めたんだから自分で解決していく。自分がわくわくするから決めたことなので後悔がない。いろいろな状況や環境があるから、わくわくするだけで全部が決められるわけではないが、わくわくしない選択をする人間を育ててもパフォーマンスが出ない。この仕事は面白いと思っている人が仕事のパフォーマンスを出しているということなので、そこを大事にしたい。

学校で実施する時にはゲーム形式だったり、大人が関わる非日常性だったり、グループ形式でチームワークだったりということを大事にプログラムはつくってきている。自分で考えて、選択して行動すると何回も出てきているが、[think][challenge][action]と、大人側としてはファシリテーションやコーチングで引き出す、認める、番宣するというように、あくまでも子どもたちが主体であるという考えに則ってプログラムを開発している。

わくわくエンジンがわかるとその子のエネルギーの行き先がわかる。子どもはどうしていいのかわからないが、自分だからこそその判断でエネルギーの行き先がわかる。自分を生かすことができるようになるということイメージして、例えばA君、B君、C君の中にわくわくするのは野球という子がいた。大人は野球が好きなら野球選手になるかと勝手なことをいうが、野球選手になれる子はほとんどいない。そうすると、中学、高校くらいで「無理かも」と気付きはじめ、「どうせ俺なんて」となってしまう。野球が好きで自分と社会の中にはいろいろとオプションがあり、そのオプションに気づいていない。A君に「どうして野球でわくわくするのか」と聞くと、「作戦を立てるのがめっちゃ面白い」と言って、B君は「チームで何かを達成するために自分が役に立っている方が面白い」、C君は「筋トレや素振り、日々小さな自分の成長を感じるのが面白くて野球をやっている」と思いが全然違う。それを周りの大人たちが気付いてあげれば、適当なことは言えない。こういう思いを持っている子はどこの企業もほしいと思う。

一番大事なことは一人ひとりを認めるという行為で、みんな違うので、一人ひとりわくわくエンジンが見つければ、あとは自分で動き出すというふうに考えている。私がよく言うのは、子どもの補助輪を外す時で、面倒くさいけれども、その時にちょっと手厚くやってあげるとあとは乗れるようになると嬉しそうにぐるぐる回って、あとはコントロールだけ教えてあげれば世界中だって、日本中だってどこでも行けるという感覚でいる。

5. 質疑 14:54~16:13

鈴木委員：このプログラムを受けて子どもたちはどう変わったのか。

A：私たちが一番大事にしているのは「すきなもののビンゴ&お仕事マップ」「個別アクションプログラム」で、「おもしろい仕事人がやってくる」と「かっこいい大人ニュース」と「コミュニケーションゲーム」というのは、どちらかという、「おもしろい仕事人がやってくる」は講演のコーディネートで、ルールがあり、「こうあるべき」「君たちはこうしないとだめなんだ」という否定がなく、本人のありのままの生きざまを語ってもらうことをしている。子どもにとって、どんなに立派な大人でもそこに人生があったり、選択があったり、思いがあったり、努力があったりしたことを知ることで、大人への敬意や憧れることがすごく大事だと思う。その大人と子どもの接点がなかなかなく、子どもは学校と家庭の狭い世界で暮らしている。その人の生き様まで話す関係にある人はそういない。そういう関係を意図的に構築するのが、この事業。

プログラムの説明をすると、説教話、自慢話はご法度で、ありのままを話してもらう。子どもは自慢話をされると「あなたは良かったよね」と冷めた目で見ると。そうではなく、どんな偉い人でもその人の人間味や憧れ、敬意を持たなければ、「うるさいおやじだな」としか思わない。そうではなく、「この人はこんなに努力をしていたのか。知らなかった」という思いを持つことが大事で、この地域を作ってくれたんだとか、影で努力をしていたんだなどの思いを持つことが大事で、その時にその方のあり方がそのまま伝わる。失敗談や苦労話はしてほしいとお願いをしている。失敗談は子どもは大好きで、それを乗り越えた人なんだということが第一になる。そうすると働くイメージが広がったり、多様な生き方や価値観を知ったり、自分にも

できるかもしれないと思う。社長が話をしても「社長は頭が良いし、すごかったんでしょ」と心のどこかで思っている。でも、雲の上の人じゃなくて親近感や僕にもできるかもしれない、やってみようかなという気持ちが芽生えることが一番大事なこと。

これをやると面白かったというが、ある意味他人事で、一つのサンプルやモデルでしかない。子どもはサンプルやモデルを知ってすごい、僕もと思うが、僕のエネルギーはどこに行くのか、どっちに向かうのかということを考えることを提供してあげないと流れていってしまうので、講演をした後に自分はどうかを考えるということワークショップとして出したりしている。その一番が「すきなものビンゴ&お仕事マップ」になっている。

自分を知り、自分と世の中のつながりに気づくというプロセスを自分の好きなものやお友達の好きなものをビンゴ化してやっていくゲームで、学校からのニーズがすごく多い。また、自分と他者との違いに気づく、また、人を認める力が付く。自分を認めてもらう経験をする。世の中とのつながりに気づいていくということをやっている。

「コミュニケーションゲーム」はコミュニケーションの達人になるというプログラムで、地域の大人たちが学校に行き、子どもたちが会社に来るということもあるが、コミュニケーションの達人になるというプログラムで、企業の方とやる時には一番人気のプログラムになっている。自分の言葉で話す経験をするとか、自分の考えや発想に気づく、自分の良いところに気づくということ。

「かっこいい大人ニュース」は大人に話をしてもらい、自分の価値観や生きざまを知る。「おもしろい仕事人がやってくる」とちょっと似ているが、もっと子どもと近い感じで話をするというものになっている。

「コミュニケーションゲーム」と「かっこいい大人ニュース」の違いは、どちらも大人が子どもたちと接触することは同じだが、コミュニケーションゲームは子どもに話させるプログラムで、子どもから引き出すプログラムになっている。かっこいい大人ニュースは大人が話すプログラムで、私たちはどちらかということ「コミュニケーションゲーム」を得意としている。

「すきなものビンゴ&お仕事マップ」「コミュニケーションゲーム」「かっこいい大人ニュース」はワークショップで、クラス全体で底上げをするようなプログラムになっている。進路決定をする時にどうしたいかというプロセスを踏んであげなければならぬので、それが「個別アクションプログラム」として、個別でプログラムを実施している。

【DVD鑑賞】

鈴木委員：自己啓発系のプログラムに近いものがあるのではないかと思います。先生方はこういうものをあまり好きではない方もいるが、学校へどういうふうに入っていたのかと、今はどういう時間の組み合わせの中で入られているのか。

A：総合的な学習や道徳、社会、国語と何の 카테고리 でもいい。これをやりたいと思う先生が一人ではなく、学校を挙げてやらないと効果が出ないので、校長先生からの申し込みがないと受けていない。

今はやってほしいという声が多いが、当時は閉鎖的で、よそのものは入るなど、学校の先生が全部教えるということで、門前払いされる時代もあった。NPOが受け入れられていないので、入るのが大変だった。ある一人の私立の先生が受け入れてくれたことからスタートしていくうちに、キャリア教育が文科の中で出てきて、子どもが社会との懸け橋になるということが求められるようになってきたという時代の流れの中では、今はすごいやりやすくなった。とはいえ、いろいろな先生がいるので、いまだに大変ではある。これをやっていく中で一番の問題は教員と親だと思っている。いくら子どもにこのプログラムをやって「わくわくして、こういうこと

をやりたい」と言っても、親が「そんなこと言っている前に勉強しなさい」と言ったら終わり、先生が応援してあげてをしなければ終わってしまう。

今までは子どもに向けてやってきたが、今は先生向けと親向けという事業の転換を計っていくタイミングにある。教員研修を足立区の先生には1年間で27名やった。あとは、親向けを始めようと思っている。私も親としてやってきたが、自分の子どもで実証できた。自分でやりたいと思うものを選ぶ土壌が子どもを生き生きとさせるということがわかり、親向けをスタートする。

委員長：文科省の教育指針としてキャリア教育が出ているが、キーパーソン21が先だったのか。

A：先です。

委員長：こっちで勝手に考えた内容は、学校ではキャリア教育は上辺だけのことしかできなく、キーパーソン21がこうなんだということを出して、学校でできないことに手をかけたのかなとイメージしていた。実際に、学校とキーパーソン21とのつながりで教育委員会が話に出てこない。

A：教育委員会はどこもつながりはある。教育委員会が言うのは、「全部学校に任せられています」と言って、学校がやりたいか、やりたくないかの采配でやってもらっているという言い方になり、学校にやるという希望があればやるという話になっている。

委員長：教育委員会経由で学校に話しするのではないということか。

A：校長会や教育委員会経由の場合も多い。川崎市の場合はそうでもないが、渋谷区や港区は教育委員会経由で校長会で話をし、毎年報告している。希望があれば申し込みを待っているというアナウンスは毎年して、校長先生から申し込みがあり、打ち合わせをして実施していくという流れになっている。校長先生としては教育委員会のお墨付きがあるとやりやすいという実態はある。

委員長：教育委員会が邪魔をするということはないということですか。教育委員会にもプライドがあって、北海道でいうと道教委から言われたことと絡めて、そこに第三者が横やりを入れると面倒なことになるからだめというようなところも無きにしも非ずだと思う。

A：足を引っ張るようなことをされたことはない。どんどんやった方がいいという感じ。経産省の事業を2年間やった時も教育委員会は応援してくれた。でも、そこに予算を付けるということはしてもらえず、川崎市の場合は教育予算があるので、学校の先生が自分で取りに行く、又は市の中の教育委員会以外の部署が予算を付けてくれたりということはある。今、出版社と計画をしていて、先生方に私たちはやり切れないので、「すきなものビンゴ&お仕事マップ」に関しては先生たちにノウハウを提供して、先生たちが自分でできるようにしてしまおうかという段階にあり、先生たちができるようにテキストと講座をセットにして販売しようと計画している。パートナーとか実際に講座をやり、地方に行き、その方たちが現場で実施するというのもやっている。

木村委員：学校として総合学習に組み入れることは可能だと思う。学習指導要領の強化が厳しくなるにしたがって、学校の独自の教育課程の編成力が阻害されてきている。突発的に取り入れるのは可能だと思うが、継続してやっていくことが学校の体制の中では非常に困難だと思う。その辺を何とか組み替えていかないと学校教育自体は崩壊していくだろうという危機感を感じている。それぞれ個性を持った地域の学校の教育課程の編成は以前から見ればできなくなっている。その辺が一番大きな問題と思う。地方の教育委員会だけではなく、北海道の場合は道教委からの圧力があり、道教委は文科省からの圧力がある。そういう部分が今一番課題ではないかと思う。せっかくいい取り組みが生まれてきていてもなかなか継続して定着できない学校の事情がある。

A：小学校2校、中学校2校、高校1校だったら5校なので、全面的にやるというこ

とをどういう仕組みの中でやれるのかはわからないが、人数的にはやれると思う。効果を出すためには3か年や5か年の計画で全員にやるのがすごく大事になる。この時に学校教育の授業にこだわらず、地域の家庭力のアップや生涯学習的など、又は違う枠組みの中でというも検討しなくてはならないのかもしれない。

本当は学校教育の仕組みの中でやれるのが間違いない。先生方も変わっていくので、こういうプログラムをアクティブラーニングという切り口の中で導入していったらどうか。キャリア教育をアクティブラーニングで子どもを育てるといような枠組みだったら言えるかもしれない。

先ほど言ったように、子どもにだけやるのではだめで、先生も親も地域全体、町ぐるみで清水町の子どもは清水町の大人たちがちゃんと育てていく。わくわくエンジンを持った自律的な子どもに育てているということが言えるような取り組みになることで、効果が出てくる。

北村委員：朝山さん自身のことを伺うが、専業主婦だったと言っていたが人と関わるような仕事を学んだことはあるのか。

A：全然ない。

北村委員：ワークショップなどのプログラムを自分で考えたのか。

A：私一人でつくったわけではなく、地域の親や企業の方、先生、学生などいろいろな立場の方が集まって子どもたちに必要なことについての議論を繰り返し、整理して作ったのがこのプログラムになる。やる時に、ここに集まってきた方がみんな思いが一緒だった。

北村委員：最初にどう呼びかけたのか。お子さんの学校崩壊のことからなのか。

A：そういう意味では地域のお母さんたちとはよく話をした。NPOなんてよくわからないとかいろいろなことがあったが、思いを共感にしても行動になる人はそういない。私がスタートした時、川崎市に女性企業家セミナーがあり、そこに参加してみて、こんなに素晴らしい人たちが各地で活躍していると知らない自分がいた。子どもたちも同じだという思いも加わって、企業家セミナーの方々に協力してもらった。中にはネットワークが広い方もいて、紹介もしてくれて、聞き取り調査などをして、私だけがこういう思いをしているのかの確認をしていくうちに芋づる式にネットワークが勝手に広がっていった。

北村委員：「ようこそ先輩」を学校でやればいいのかと思っているが、実際にはなかなかそういうことをやっていない。例えば、小学校の時に野球選手になりたいという夢を抱いたりするが、将来はどういった職業につきたい、どういう仕事をしたいということを考えるのは、子どもたちそれぞれ違うと思うし、僕の知っている範囲でいくと看護師さんになりたいというのは中学生ぐらいの時に覚えることを覚えて、高校に行かず看護学校に行きたいという子がいた。少なくとも小学校でやるプログラムと中学校でやるプログラム、あるいは高校でと子どもたちの年齢によって違うものが必要だと思っている。総合的に考えるとしたら、私の町には高校はあるが、道立高校だから自治体の教育委員会は関わっていないような感じで動いている。小・中連携は言うが、中学校を卒業して高校に行く場合のところでは、中学校で進学指導をしているが、必ずしも高校と連携がとれているようには思えない。

A：それは東京も同じ。小中一貫校が増えているが、連携しているかというところはまだまだなところもたくさんある。中高一貫もうまくいっているかというところとは限らない部分もある。私たちの考えとしては、人生はずっとつながっているから、小学校時代だけ何かやればいいのか、中学校のこの時期だけやればいいのかというものではないと思う。ただ、毎日考えることではないと思うので、節目節目で考えていく。

斉木課長：このプログラムをすごく共感しているし、自分の考えと似ている部分もある。このプログラムは北村委員が言ったように、それぞれの年代でやった方がいいのか、例えば小学校6年生でやって、1年間で何時間かやるプログラムは受託されている

のか。

- A : 学校によって計画が違う。先生たちが中学と高校で連動しているかという、ちょっと怪しいので、私たちが「やってください」と言われると、学校の先生方は学校として何をさせたいのか、子どもたちをどう育てたいのかを聞き、その中でこの学年ではこういうことを考えているか聞き取りをし、だから「コミュニケーションゲーム」が必要だとか、「すきなものビンゴ」が必要ということによってもらえるので、単発でもそこに入る価値ができる。その計画の中に当てはまるのであれば、やります。あてはまらないのであればやれないので、本当であれば先生方への研修もセットにして、先生方にこのプログラムを理解してもらわないと、終わった後に活用してもらえないので無駄になる。先生への研修と子どもへの実施、事後のフォローというものがセットになっているのが理想だが、先生方も忙しいのでなかなかそこまでいかない。今年は教員研修を受けてもらえなければ断ろうと思っている。

キャリア教育とは何かと思っている先生はたくさんいて、職場体験と思っている先生が多い。職場体験はキャリア教育の一部で、自分を知る、社会を知るという部分ではとても大事なことだが、それだけがキャリア教育だと思うと子どもへのキャリア教育が十分だとは言えない。子どもが自分でわくわくするものを探し出して、主体的に動くということと一緒にやりませんかということ。

齊木課長：理想として、小・中・高連携教育ができたとして、15才までの中でこんなような意識をつくりたいとすれば、どういったプログラムを何年生にやればいいのか。

- A : 小5、小6で「すきなものビンゴ&お仕事マップ」を2回くらいやる。中1か中2で「すきなものビンゴ&お仕事マップ」あるいは「コミュニケーションゲーム」。「かっこいい大人ニュース」が2年生か3年生で入ればなおいいかなと思う。中3は「個別アクションプログラム」が効果的だと思う。

私たちは今、貧困家庭の子どもへの学習支援・居場所づくり事業をしているが、12名中3がいて、12名全員が全日制高校に合格する構想を達成した。そういう子は通信や定時制に行く子が多いが、個別アクションプログラムを行い12名全員全日制に合格した。高校生でも個別アクションプログラムがいいと思っている。

中学3年生の男子で9月にお母さんに無理やり連れてこられた。塾に行くお金もないので、ただの塾みたいなものだから連れてこられた。6時半から8時半まで勉強を見るが、8時25分頃に来る。来たという事実をつくって、「5分でもいいからやろう」と言って、初めはそんな調子でだめだった。成績は1と2、提出物は出したことがない。その子に個別アクションプログラムをしたら、その子は幸せな家庭を築きたいんだと。そのためにお金を稼がなければならないことはわかっている。どうせ仕事をするんだったら好きなことをしたい。実は僕は小さい頃からものを作るのが好きで、工作とかが得意なんだ。おじいちゃんが宮大工だったみたいで、そのことをすごく誇りに思っている。建築に関する仕事がしたいと言い、物を作ることがわくわくエンジンで、建築科のある学校に行って資格を取りたい、勉強したいと言い出した。彼女がいて、毎日8時25分に来て、8時半に彼女が待っていて、彼女と一緒に自転車で帰るが、その彼女と一緒に暮らして幸せな家庭を築きたいと言って、勉強したいと、ころっと変わり、どんどん勉強を始めて早く来るようになり、宿題もやるようになってきた。その時の成績が1と2だから、建築科のある近い学校といっても、一番偏差値が下の定時制高校に行けたらいいねくらいな感じだと思っていたが、どんどん頑張りだすが、人は浮き沈みがあるので突然やなくなる時もある。なので、学習サポーターが「この子が突然宿題をやってこなくなっちゃただけけれども、どうしたらいいか」というので、「どうしたの、彼女と幸せな家庭を築きたかったんじゃないか」と言うと、「あ、そうだった」とまた勉強を頑張りだす。自分のわくわくエンジンの原点に戻る時がある。嘘のない本心、親がこうしろと言ったからでもない自分がこうしたかったということ思い出す。そ

のエネルギーがどんどん出てきて、最終的には土壇場で成績がどんどん上がっていき、偏差値的には一番下の学校だが、全日制の建築科のある学校に合格した。合格発表の当日、お母さんが泣きながら「うちの子がこんな学校に行けると思わなかった」と菓子折りを持ってきて、時々顔を見せに来る。「ガソリンスタンドでアルバイトを始めて、資格を取ったら 100 円時給が上がる」と言って、うちのサポーターたちが見ていたり、関係ない資格の勉強を見ていたりとかしていたが、そういうことで、高校生が大学行くにしても何のために行くのかという子がたくさんいて、わからない。高3の女子高生は、中高一貫の進学校で全員が大学受験をするという教育環境にある子だが、やる気も起きないし悶々とする毎日でお母さんがすごく困られていて、このプログラムを活用したら、物を携帯で売るということにわくわくしていて、マーケティングを学べる大学を探し、夏くらいから勉強を始めて大学に合格した。合格することが目的ではなく、その思いを持って努力をする。自分の向きたい方向に向かうということが大事なこと。

齊木課長：親、先生に対しての働きかけで、せっかく子どもがそういう気持ちになっても周りの人間が潰してしまうので、戻ってしまう。今後どのようなことをしていくのか。

- A：いろいろなやり方があると思う。やはり、先生や親も自分でそう思ってもらえないといけない。私たちがやること自体も研修はティーチングではなくコーチングやファシリテーションの手法で検証する。親に向かってやるのは、親向け寺子屋というものはじめ、「すきなものビンゴ&お仕事マップ」を体験し、自分のわくわくエンジンを探してもらおう。親も自分のわくわくエンジンが必要になるので、親子でやったりして、子どもも親を応援してくれたり、親も子どもの意外な一面を知って気づいていくと相互理解ができて、お互いを独立した子として向き合うことができ、お互いを尊重し合う。子どもへの理解、親への理解で相互理解を積んでいくことをやりつつ、このプログラムの解釈を入れていくということを親向け寺子屋ではやろうと思う。親向けに対しては親子ごとにさまざまな悩みや課題を持っている。100人の親がいたら100人の悩みがあるので、それを共有しながら一緒に考えていくというような、こちらが答えを持っていて答えを言ってあげるのではなく、その方がそのことを思わない限り行動にならないので、一緒にディスカッションをしたり、考えたり、共感したりしながら進んでいくような場所づくりをしていくのが親向け寺子屋である。

齊木課長：例えば、自治体などで受託事業でやると親に負担はあるのか。

- A：これからスタートするので、自主開催では5月28日にここでスタートする。あとは、金沢で文部科学省のCOCクラスがあり、金沢大学が中心となって医師関係と地域活性のために大学生を育てるという事業で、8大学が連合され地域活性をする。学生が大変だから逃げてしまい、大阪や東京に行ってしまう。地方大学の使命としては、残ってもらって金沢を活性化してもらわないと困る。でも、学生をしばらくつけても逃げてしまう。そこで、金沢を愛するとか、金沢のために貢献したいと思う気持ち、金沢を誇りに思わない限り逃げていく。金沢の人と接触することによって金沢の誇りを伝えてもらい、学生も金沢の魅力ってこれだったんだと。もしかしたら、海外に行ったり、東京に行ったり、大阪に行ったりするかもしれない。でも、いずれ絶対金沢のために尽くす人になるから、お金を落とすようになるという考えのもとに、うちのわくわくエンジンを根底に導入してもらおうことが決定した。5年くらいやることになると思うが、これをやる時に学生だけにわくわくエンジンをやってもだめなので、企業側も理解して、学生がそんな思いを持っているということを企業側が理解をする必要がある。インターンシップをつくる時もそういうインターンシップの作り方をすることになっている。あとは、石川県の行政の方が来て、「あと足りないものはあるか」と言われたので、「親の教育です」と、親の教

育はCOCクラスでは予算化できないので石川県が付けることとして、親子や寺子屋をやっていくという、これからスタートする段階になっている。教員研修は教員研修で違う形で底上げとして、親も何が問題で子どもとのコミュニケーションギャップが生まれているのか、先生も何が問題で生徒が学校に来なくなるのか、意欲が低下するののかということを考えていってもらおう。こちらが言っても、その方たちがそう思わない限りそうならない。その方たちがそう思ってアクションを起こしていくという社会になっていかなければならない。そうすると、足立区の教員研修の時も先生方に言われたのが「何をおっしゃりたいのか教えてください。キャリア教育とはなんですか。私たちは何をすればいいんですか。」と答えを教えてくださいという。一言でいえば「主体性を育むことです」と。言葉で言っても先生が授業の中でやれないと、本当の意味で主体性を育むことができない。そうすると、先生自身が答えを教えてもらいたがっているのだから、それは違うと思われ、先生方がこれから1年間の研修の中で考えていっていただいて、自分なりの納得を出してほしい。これをどういうふうに授業の中に反映するかは、先生方が工夫して考えていくことと伝えしたが、結構反発があった。最終的に先生方はすごく変わられて、「朝山さんが言っていた意味がよくわかった」「どういう授業をやるかは教員が考えて、子どもを一人ひとり引き出していくという意味がわかった」と言って、授業がすごく変わっていった。子どももいきいきとするし、考えるようになるし、発言するようになる、行動に移すようになるというふうに転換していった。これは1年の成果だと思っている。それは教えたからではなく、先生がこうしようと思ってやっているから実現していくことで、それはその先生の一生の財産になると思う。

北村委員：先生方も学校の中で正解を知る勉強しかしてこなかった。常に答えがあって、自分で考えるということができていない。

A：答えのある100点満点のテストをやってきているが、それをやってきたからといっても社会は刻々と変化をしていて、外国人もどんどん入ってきているので、ぼやっとしていっていると負けてしまうし、会社もどんどん外資になって占領されてしまう。そんな中で日本人が自分で考えて行動していくという力を付けないといけない。

北村委員：ゆとり教育とはそういう意味もあったはずなのに、それをまた戻してしまったので、変だという気がしている。学生のSEALsみたいに自分で物事を考えて判断して行動できるというのが、ゆとり世代だと思う。

A：こうならないと生き残っていけない。これから無くなる仕事、残る仕事がデータで出ているので、やはり自分で考えてクリエイティブに考えていく子しかいらなくなってしまう。全部機械がとってかわってしまっているのだから、そうすると、地域の活性化ということを自分から考えてくれる子が必要だと思う。

北村委員：地方創生とっているが、大人たちのわくわくエンジンを見つけないと、現役の人やリタイアした人はその再教育の中でまちづくりをしていかなければできないのではないかと思う。

A：皆でつくっていくものなので、私がいつも言うのは、枠組みの中に子どもをいれてもその社会は衰退していくしかない。でも、未来の社会を創る子どもたちを育てるということを私たちがすれば、私たちが死んでも子どもたちが良いようにやってくれると思う。そんな子どもを育てることが一番の教育の目的ではないかと思う。

北村委員：協賛企業とパートナーシップ提携というのは、どういった中身なのか。

A：企業にはお金と人を出してもらっている。

委員長：朝山さんが今までの話の中で教師のことにも目を向けて、親はいいが、反発心もあったと思うが、その人たちが実際にいて、流れの中で学校の先生だからそこをないがしろにはできないという現状はあるとしても、学校は学校であっても学校の先生はとにかく学ばせるだけ学ばせてくれればいいと。こっちの分野では朝山さんをはじめキーパーソン21であったり、他の団体がどんどんできていって、そっちが受

け持つということになったら、学校の先生を絡めない方が理想だと思うか。

- A : それは違うと思う。学校の先生は子どもたちとすごい長い時間いる方なので、役割分担という意味では、先生は学校の全授業を教える人という役割分担で割り切ってしまうこともありなのかもしれないが、そういう先生はいらなくなってしまったので、先生たちもどんな子どもを育てたいのか、教師になぜなったのかということを考えて時に、おのずと答えは先生の中で見えてきて、こういう子どもを育てることが教師としての使命としてやりたかったことだと思われるので、そうなった時に本当の意味での教師になっていくと思う。なので、親も教師も底上げする形でやっていかないと根本解決にはならないと思う。学校がNPOがやってくればいいという風潮がまだまだあるが、そうではなく一緒にやろうということにならないと、例えば家庭で夫婦の方針が違ってケンカばかりしていたらいい子になかなか育たないので、そういう感覚でやっている。

中島委員：学校と親、地域ぐるみという話があったが、それはちょっと無理だろうと、どこからきっかけを作るのかと思っていた。うちの町は人口1万人弱で規模的にできると、地域ぐるみで可能性があるという話で、できたらそうなれば一番いいだろうという話だった。それはそれとして、やはりきっかけが必要だと思う。私は今の管理職の時代と今の子どもは違う。過去の教育に問題があるというのは私はおかしいと思う。平均教育から時代が変わって、昔の子どもたちは情報を得られなかったので、世襲というのは当たり前前に思っていた時代だった。今は子どもたちはいろいろな知識を持っているので、逆に不満も出てくる。自分がどうしたいかわからなくなるというのが、今と昔の違いで、今の時代にマッチしたキャリアで応援してもらおう。その部分と学校教育でやっていくことは基本的に学力的には違うと思う。だが、人として、前向きに進んでいこうという教をキーパーソンで力を入れているのかなと捉えている。

- A : 昔が悪いと言っているわけではなく、そのおかげで産業は発達したし、私たちが生きていけている。そのままでは立ち行かなくなってきているという現実があるので、私たち大人も変わっていかなくてはならない。

中島委員：大人はまだついていけない。

- A : これからもっと変わってきてしまうので、社会の変化に対応できる子どもを育てていかないといけない。

口田委員：修学旅行生のことでお願いしたいのだが、大阪の高校生が毎年5、6校修学旅行生を家で受け入れているが、たいがい4泊5日する。1日を農家の家庭に泊まって体験してもらっている。たった1日のことだが、来た時と帰った時の目の色が違うので、今ここでやられていることも最終的には自然の中でもひとつの方法があるのではないかと、その関わり網を持ってもいいのではないかと思ったので、もしそういう考えが浮かんだら、こういう繋がりもできたのでうちの町も検討してほしい。

- A : 都会の子どもたちの一番の問題点は自然と遊べないこと。感性が鈍い子が増えている気がする。

中島委員：こういう研修は年に何回あるのか。

- A : 例えば、神奈川県労働局からの依頼がよくある。

中島委員：田舎から出てきて教えてくださいという例はあまりないのか。

- A : 多数ではないがある。

【写真撮影】

6. お礼の挨拶 16:13~16:15

鈴木委員：略

7. 閉会 16:15

